

戯曲

デ
イ
オ
ニ
ユ
ソ
ス

—二人の母—

I

正
道

SEIDOU

目次

ディオニュソス 二人の母 I	
第1巻のあらすじ	3
全体の目次	4
第1章 神を待つ男	
登場人物	9
フリギュアの海岸	10
海岸、船の傍らにて	12
第2章 ポリュドーロス	
登場人物	18
早朝、靄がかかったテーバイの墓地	18
テーバイの王城	22
第3章 カドモスとアガウエ	
登場人物	29
狩りの風景	29
テーバイの王城	34
セメレーの墓の前	39

ディオニュソス 二人の母
I

第1巻のあらすじ

オリュンポス十二神の一柱であるデメテル。彼女には、ペルセフォネーという名の一人娘があった。まるで美の化身のような娘であったが、その美しきこそが彼女の仇となる。ゼウスに目をつけられ、ついにはこの大神に、無理やり犯されてしまったからだ。しかも二人の間には、ザグレイウスという名の子供さえ生まれた。

不本意な子供を産んだペルセフォネー。彼女はこの子供を認知しないどころか、出産についての記憶自体を捨て去ってしまった。そのため捨て子同然となったザグレイウスは、アテナによって、クレタ島へと運ばれることになった。アテナにそうしろと命じたのはゼウスだった。クレタ島には、住処としての洞窟と、世話係としてのシレノスが用意されていた。

ところが、このザグレイウスを、ティターン神族の神々が見つけてしまう。そして、ティタノマキア（巨神戦争）でゼウスに負けた彼らは、これを絶好の機会として残酷な復讐を果たした。すなわち彼らは、ゼウスの息子であるザグレイウスを、八つ裂きにして食べてしまったのだった。

洞窟に残されたのは、ザグレイウスの心臓だけだった。ゼウスはこの心臓を呑み込む。そして、その言わば「孕んだ」状態でもって、テーバイの姫君であるセメレーと交わった。

間もなくセメレーは妊娠するのだが、この胎児こそは、ザグレイウスの生まれ変わりであるディオニュソスだった。

こうして再生しつつあったディオニュソス（ザグレイウス）だが、セメレーと夫の不倫に嫉妬したヘラによって、その成就を阻まれてしまう。すなわちヘラは、巧妙な策謀によって、セメレーを焼死させてしまうのである。

胎児であるディオニュソスもまた、当然そのときに焼死するはずだった。

しかしこれを、再びゼウスが救う。ゼウスは自分の太ももに穴を開け、そこに胎児ディオニュソスを埋め込んだのだった。

その後、月満ちて、太ももから赤ん坊として生まれると、ディオニュソスは、ゼウスにより子鹿の姿に変身させられた。そうして、その姿のままで五年間、ニュサのニンフ村で育てられることになる。

五歳になったディオニュソスは、再び人の形となり、伯母であるイノーの家へと運ばれた。体に染みついた動物臭を消し、人間らしさを取り戻すためだった。

一方、オルコメノスの王家に嫁いでいたイノーは、夫にアタマース王を持ち、また二人の子供にも恵

まれていた。ディオニュソスは、ヘラの目を晦ますために女装させられ、イノーとアタマースの娘として暮らすことになった。つかのまの平和が訪れたかのように見えた。

ところが、そこにヘラの魔手が及ぶ。というのは、ヘラの依頼を受けた復讐女神が、オルコメノスの王家を滅亡させてしまったのだ。惨殺された王家の面々を見たディオニュソスは、そのショックのあまり発狂してしまった。

ゼウスは、発狂したディオニュソスに、最低限の治癒と導きとを与える。お前を救えるのはフリギュアのキュベレー女神だけである、と。

そこでディオニュソスは、船長アケテスが操る船に乗ってフリギュアに渡る。そしてキュベレー神殿において、地下の世界へと降っていった。

その地下世界でディオニュソスが出会ったもの。それは、ヘルメス・トリスメギストスという偉大な神と、自分の本質である「虚無」だった。

そして、この虚無に、創造神たるゼウスが合体することによって、そこに「虚無からの創造」という真理が現れた。この真理が放つ光によって、ディオニュソスの狂気は一気に吹き払われた。と同時に彼は「虚無の神」として成立した。つまりディオニュソスは、そのとき神の石柱として完成したのだった。

完成したディオニュソスは、虚無の真理を携えて布教の旅に出る。キュベレー神殿で下僕を勤めていたシレノスと、キュベレー女神から与えられたマイナス（女信者）を連れての旅だった。

以後十年、ディオニュソスは、フリギュアの地を起点に、そこから中東、インドへと彷徨することになる。

全体の目次

第一巻のあらすじ

第1章 神を待つ男

第2章 ポリュドロス

第3章 カドモスとアガウエ

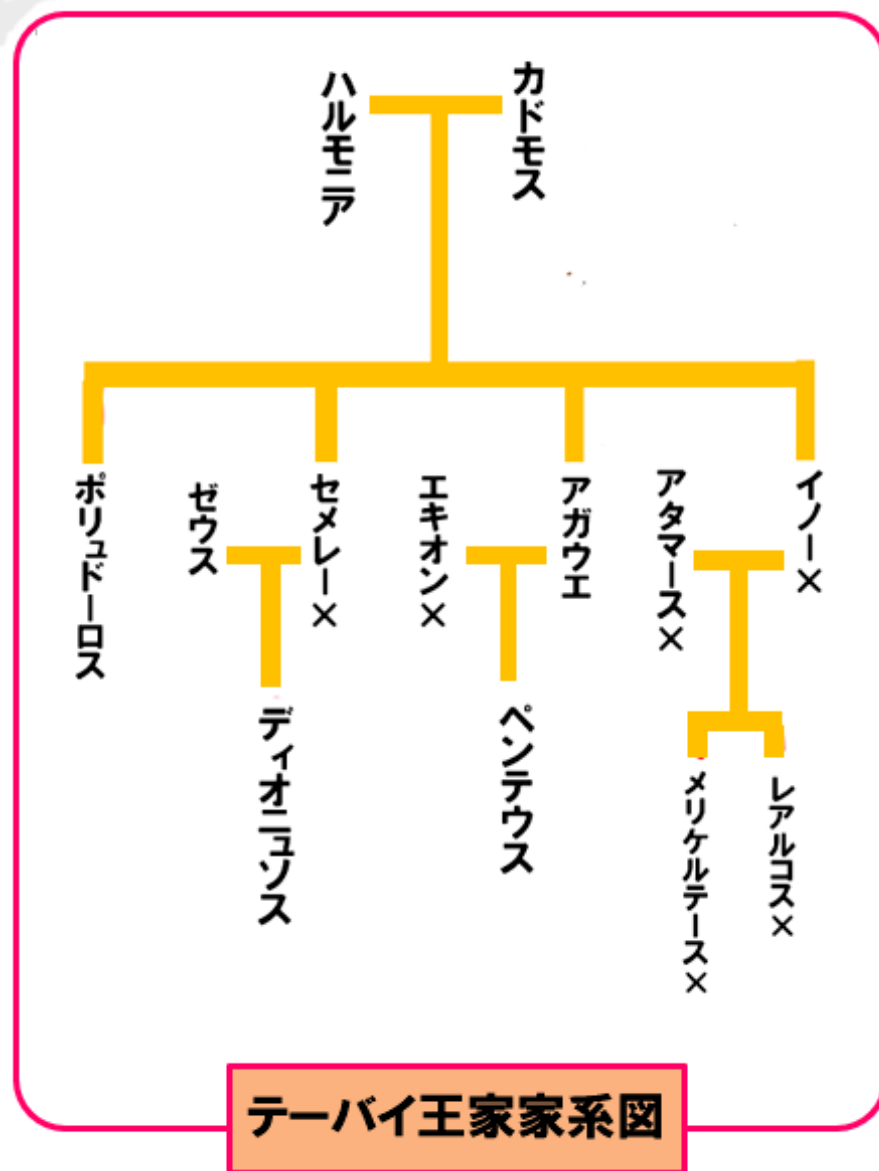
第4章 闖入者

第5章	ペンテウス
第6章	バツコスの信女
第7章	プシュコポンポス
第8章	冥府行き
第9章	ケルベロス退治
第10章	ペルセフォネー
第11章	テュオーネー



関連地図

2024.08.07 (6) .png



第1章 神を待つ男

登場人物

アケテス 船乗り。かつて商船マイオニア号で、ディオニュソスをオルコメノス（ギリシア）からフリギアへと運んだことがある。それから十年たった今は、ディオニュソスを「フリギアからギリシアへ」運ぶために、海岸でディオニュソスが訪れるのをひたすら待っている。

子供 ひと言でいえば「悪ガキ」である。現代の、浮浪者を襲撃する若者たちよろしく、海岸に佇んでいるだけのアケテスに悪戯する。年のころ十歳ぐらい。名はアドメトス。

母親 右の子供（アドメトス）の母親。名はメッセネ。

父親 右の子供の父親。

ディオニュソス 酒の神、虚無の神。その姿は凛々しい若者のそれである。頭にブドウの葉の冠をかぶり、手にはテュルソス（神杖）を持っている。かかるテュルソスはヘルメス・トリスメギストスの杖の形状を模倣した、木と蛇で出来た杖である。そして、かつて小鹿だったこの神は、いまは鹿の皮を身にまとっている。

シレノス デイオニュソスの従者で、半獣半人の神。ひげを生やした老人で、馬の耳と足、尾を持っている。十年前にアケテスと会っている。

モルティ マイナス（ディオニュソスの信女）の一人。

☆ **シヴァ** インドのヒンズー教における破壊の神。

☆は、物語に直接登場しない人物、神など。登場人物

フリギュアの海岸

初老に差し掛かったアケテスが、砂浜で海を眺めている。彼のそばには、住まいとしても使われている船（マイオニア号）があり、その船体はきれいに手入れされている。

他方、アケテス自身は、いかにもみすぼらしく汚れている。その目は寂しそうに涙を溜め、呼吸はまるで、その全てがため息であるかのよう。そんなアケテスの背後を、二十メートルほど離れて、中年の女とその子供が、話しながら通りすぎる。

子供 見てよ母さん、あのバカ野郎、あいも変わらず海を眺めてら。ここから石でも投げつけてやろうか（石をひろう）。

母親 やめなさいよ、ひどい仕返しをしたらどうするの！ きっと気がふれてるんだから近寄っちゃだめよ。放っておきなさい。

子供 大丈夫だよ、みんなやってるんだから。それ！

「子供が石を投げると、その石がアケテスに命中する。しかし、それでもアケテスは表情を変えないし、座ったままである」

母親（慌てて） バカ！ やめなさいって言うのに！

子供 平気なんだよ、あいつは。でも見て、こっちに投げると面白いんだ。

「子供がふたたび石を投げると、今度はアケテスの横の船、つまりマイオニア号に当たる」

アケテス 誰だ！（振り向きながら立ち上がり、走り出す）

子供 母さん、走って！

母親 は？

子供 あいつ船にイタズラされると、スゲー怒って追いかけてくるんだ。だから皆で石をぶつけて、逃げて遊ぶんだよ。

母親（走りながら）何よそれ！　なんで母さん走らなくちゃならないのよ！

子供　追いかけててんだもん。逃げるに決まってんじゃない。

母親　バカバカ、そういう話じゃない！　家に帰ったら覚えてなさい、徹底的に叱るからね。本当にもう、子供って要らない事しかないんだから！

「アケテスが鬼の形相で追いかけてくる」

子供（振り返って）うわ、マジでスゲー怒ってる。早く逃げないと母さん。

母親　もうやだ、足が重い！

「走る母子のまえに、こちらへ歩いてくる男の姿が見えてくる」

子供　あれ、父さん？

「子供はそのまま父親に向かって走り、勢いのまま通り過ぎようとする。しかし父親は、子供が自分のところまで来ると、無言のまま子供を殴る」

母親（立ち止まって）あなた！

「子供は殴られて倒れている。父親はその子供の首ねっこを掴んで持ち上げると、今度はそのまま、母子が走ってきた道を逆戻りする。アケテスはこちらに向かっていてるので、結果的に両者が近づくことになる」

母親　あの人のところに行くの？

父親　そうだ。

「走り疲れて歩いていたアケテスと家族が接触する」

アケテス　ハア、ハア、ハア……

父親　どうもすまなかった。親の不徳が、わが子の恥ずべき行いを導いてしまった。この子には、家できつく言い聞かせるつもりだ。どうか許してくれ。

アケテス（ブツクリと膨れた子供の頬を見て）大丈夫なのか……？

父親 あなたが気にすることはない。この子は、こうされるだけの事をしたのだ。父親は子供に、因果とか応報といった、世の中の秩序を教えなければならない。だからこれは、当然なすべき教育の一環なのだ。

母親 私も謝ります。子供と一緒に逃げたりして申し訳ありませんでした。

アケテス いや、もういいんだ。

父親 ではメッセネ、お前はアドメトスを連れて家に帰れ。家にはちょっと変わった客がいるはずだから、その世話を頼む。

母親 変わった客？ あなたは？

父親（アケテスのほうを見ながら）私は、この御仁と少しばかり話をしてみたい。

アケテス 話を？

父親 いやかな？

アケテス いや構わない。あなたは誠実な人のようだから。

海岸、船の傍らにて

アケテスと「父親」が、並んで海を眺めている。もう日暮れどきで、斜陽が二人の体をオレンジ色に染めている。

父親 すまないな、時間を取らせてしまって。あなたの噂話はよく聞くのだが、実際には会ったことがなかったのだ、この機会を有効に使おうと思ったのだ。

アケテス 時間のことは気にしなくていい。私にとって重要なのは、船の手入れをしている時間だけなのだから。それ以外は、あまりにも経つのが遅い「待ちぼうけの時間」でしかないのだ。

父親 そうなのか。

アケテス ここは余所者には冷たい村のようだな、私のもとには、本当に誰もやってこないのだよ。だから、こうして人と話すことで時間を短くすることも出来ない。

父親 そんなにも孤独だったのか。

アケテス ああ、私のそば近くまで来るのは、残酷な子供たちと、ほら、あそこに見えるイルカたちぐらいのものだ。

〔波間に三頭のイルカが見える〕

父親 イルカが好きなのか。

アケテス いや、彼らは昔、私の仲間だったのだ。いや、敵かな。

父親 はて？

アケテス いやいや、話しても仕方ないことだ。

父親 では、あなたが誰を待っているのか教えてくれないか。さっき言っていただろう、船を手入れする以外の時間は「待ちぼうけの時間」なのだと。

アケテス ああ、いかにも私は待っている。

父親 誰を？

アケテス 神を。

父親 神をだって？ あの気ままな神々のうちの誰かを待っているというのか。ムダだムダだ、神々は人の気持ちなど顧みたまわぬぞ。それをひたすら待っているなんて馬鹿げてる。

アケテス いいや、私の神はそんな神ではない。あの神は、平気で人との誓いを破れるような方ではな

い。そして、かの神は確かに私と約束したのだ。この船に乗って、私と一緒にギリシアに還ると。

父親 つまり、その神はギリシアの神なのだな。ギリシアの神がフリギアに渡って来た。そうしてあなたの船に乗って、もう一度ギリシアに戻るのだな。

アケテス そうだ、そのように約束したのだ。

父親 して、その神の名は？

アケテス デイオニュソス。

父親 おお、聞いたことがあるぞ。このフリギアにおいて、キュベレーさまによって秘儀を体得されたという神だな。その神が、あなたの神なのか。

アケテス そうだ。愛すべきデイオニュソス神、私の神だ。

父親 かの偉大な神をフリギアに連れてきたのが、あなただったとは。

アケテス 偉大な、か。偉大には違いないが、私が船に乗せてきたのは、汚れた着物を着て、謔言を口走っている狂気の神だった。デイオニュソス神は、その狂気を払うために、キュベレー女神のところへ向かったのだ。

父親 ほう、かの神は狂っていたのか。だが、その狂気は実際に振り払われたのだろう。デイオニュソス神は、今や泣く子も黙る、高名な神となられたのだから。

アケテス そうなのだろうな。だが残念なことに、かの覚醒された神は、この海岸とは反対の方向へと旅立たれてしまった。

父親 ああ、そういうことらしいな。

アケテス 私は旅人たちから情報を集めて、かなり正確に、デイオニュソス神の足取りを掴んでいる。ここ十年の足取りを。

父親 ただ待っていた訳ではなかったということだな。では聞こう、デイオニュソス神は、この十年の間に、いったい何をしていたのだ。

アケテス 要は、放浪しながら自分の祭を広め、それによって信者を増やしていったのだ。たしかフリギアからペルシアへ。さらにシリアを経て、ついにはインドの手前まで行ったらしい。

父親 インドの手前か。それは違うな。

アケテス 違うだって？

父親 インドまで行っただよ。そこでヒンズーの神々に出会った。とくにシヴァという神には、私とそっくりな役割を見た。すなわち破壊の果てにある虚無と、そしてさらに「虚無からの創造」を。

〔父親の体が輝きだす〕

アケテス まさか……

ディオニュソス（本来の姿に戻って）そう、私だよアケテス。私はこの海岸に戻ってきたのだ。お前と一緒にギリシアへと帰るためにな。ずいぶんと待たせた。

アケテス（泣きながら）おお、何という輝かしい姿……本当にあなたなのですね、ディオニュソスさま。

ディオニュソス ああ。

アケテス どうかよく顔を見せてください。ああ、かつてこの地に運んできたときの姿とは全く違っている。あのときの弱々しさなどは微塵もない。眩しいぐらいに逞しい、崇高で神々しい姿だ。あなたは本当に偉大な神とられたんですね。

ディオニュソス お前が私を、このフリギアに運んでくれたおかげだ。

アケテス 何というもったいないお言葉……十年間の待ちぼうけを贖って、なお余りあるお言葉です。本当にあなたを待っていて良かった。

シレノス（マイオニア号の甲板から）おーい、ディオニュソスさま、私とマイナスたちは乗り込みましたぞ。とてもキレイな船です。

アケテス え、いつの間に！

モルティ（マイオニア号の甲板から）船の隅まで整備が行き届いています。

ディオニュソス（アケテスに）お前も知ってのとおり、私はフリギアや中東で、多くの信者を獲得した。けれどもギリシアには、シレノスと四人のマイナスだけを連れて行くことにする。あとは私とお前とで全員だ。

モルティ（甲板から）でもディオニュソスさま、今夜ぐらいいは休ませてくださいよ。さすがに歩き疲れてしまいました。

ディオニュソス そうだな、もう日も暮れた。明朝に出発することにしよう。

アケテス では、明日行くですね。

ディオニュソス ああ、行くぞ、ギリシアに。

第2章 ポリユードロス

登場人物

ポリュドーロス テーバイ国の王族。カドモス王の息子であり、イノー、アガウエ、セメレーという三姉妹の弟である。三十歳を過ぎたぐらい。

ディオニュソス セメレーの息子。ゆえにポリュドーロスの甥にあたる。

カドモス テーバイ国の前国王。若いころは賢者の風格を漂わせていたが、老いてやや暗愚になった観がある。

アガウエ カドモスの次女。ペンテウスの母親でもある。

テイレシアース 盲目の老予言者。若いころは目が見えていたが、女神アテナの水浴を見てしまい、怒ったアテナによって盲目にされてしまった。しかし後に不憫に思ったアテナにより未来を見通す力が与えられた。

クレシラス テイレシアースの従者。盲目である主人の目となって働く若者。

☆ **ペンテウス** アガウエの息子。テーバイ国の国王。今は外遊のため隣国に赴いており、テーバイを留守にしている。

早朝、霧がかかったテーバイの墓地

ギリシアのテーバイ王国。その一角に、王族専用の墓地がある。そこにポリュドーロスが佇んで、小さな墓に花を手向けようとしている。かかる小墓には「セメレー」の文字が刻まれている。

ポリュドーロス（背後からの物音を聞いて）来たんだな、ディオニュソス。

「ディオニュソスが、ポリュドーロスの背後から正面へと歩いてくる」

ディオニュソス 叔父上ですね。初めてお目にかかります。

ポリュドーロス ああ、ようやく会えた。正直、手紙で何度かやりとりを交わしているうちに、君と直に会ってみたいという気持ちを、抑えられなくなっていたんだ。

ディオニュソス 私ものです。もうオルコメノスでじっとしている事が出来ませんでした。

ポリュドーロス 顔を見せてくれ。ああ……やはりどこか、セメレー姉さんに似ている。

ディオニュソス（胸を衝かれたようにして）……そうなんですか。じゃあイノー伯母さんにも似てるんでしょうね。たしか伯母さんと母が、生き写しだったとか。

ポリュドーロス イノー姉さんか。確かにそうだが、もう十年も前に亡くなってしまった。君はイノー姉さんに会ったことがあるんだったね。

ディオニュソス イノー伯母さんは……ええ、僕が殺したも同然なんです。ヘラに追われている僕をかくまって、それでヘラに殺されたのですから。それどころかヘラは……いや僕は、オルコメノスの王家そのものを消滅させてしまいました。

ポリュドーロス（取り繕うように）いや、それは昔の話だ。それより君の現況は、手紙ばかりでなく、風説によっても私のもとに届いている。それだけ君は有名人なわけだ。聞けば、オルコメノスの地は、もう君の信者で一杯らしいじゃないか。

ディオニュソス そうですね、二千人ぐらいにはなりました。

ポリュドーロス つまり君は、オルコメノスに、ギリシアで最初の足掛かりを作ったわけだ。

ディオニュソス 叔父上以外、テーバイにいるのは、私の敵ばかりでしょうからね。ここに来る前に、敵に潰されないだけの勢力を作っておかなければならなかったのです。

ポリュドーロス 手紙にもそんな風を書いてあったね。でも、今は一人かい。

ディオニュソス 今の私は、神としての役割を脱いで、セメレーの子ディオニュソスという、一人の人間に戻っていますからね。信者を連れて歩くことはしません。

ポリュドーロス そうか。

ディオニュソス それに、母の墓ぐらい、一人で訪れたかったです。そして、これがそうなんです。

ポリュドーロス そう。これがセメレー姉さんの墓だよ。

ディオニュソス 花を捧げてくれたのは叔父上ですね。きれいな花だ。けれども墓そのものは小さい。驚くほど小さい。これでも王族の娘の墓なんですか。

ポリュドーロス 父カドモスが……というより、父に入れ知恵しているアガウエ姉さんが、大きな墓を造るのを許さなかったんだ。セメレーは、テーバイ王家の恥だからと言ってね。

ディオニュソス ああ、イノー伯母さんから聞きました。アガウエ伯母さんが、母上のことを侮辱していることは。あの人は母上のことを、下賤の者と姦通したのに、それをゼウスだと騙ったために、神罰を下された女だと考えているのだと。

ポリュドーロス まさにそのとおりさ。つまるところ独断的な想像に過ぎないのに、アガウエ姉さんは、それを王城はおろか、この国全体の常識にしまった。父王を取り込んで、そういう情報統制を布いたんだ。

ディオニュソス なぜアガウエ伯母……いや、アガウエは、そんなにも母を嫌うのですか。

ポリュドーロス それは、君が生まれる前に、アガウエ姉さんが、ペンテウスという息子を生んだからさ。

ディオニュソス ペンテウスという息子？

ポリュドーロス そう。アガウエ姉さんは、そのペンテウスが、将来のテーバイ王になることを望んでいた。まあ当然と言えば当然のことだ。

ディオニュソス ……

ポリュドーロス しかし妹のセメレーがゼウスの息子を生んだとなれば、国民は、その「神の子」を、将来の王にしたがることだろう。何といっても、神の子が治める国には、父神からの恩恵が与えられるだろうからね。つまりディオニュソス、君にはペンテウス以上に「テーバイ国王になる可能性」があったんだ。

ディオニュソス 僕がテーバイ王に……考えたこともなかった。

ポリウドーロス だからアガウエ姉さんにしてみれば、セメレー姉さんは、神の子などを懐胎してはならなかったんだ。息子ペンテウスの将来を思えばね。もしセメレー姉さんが懐胎したとすれば、それは「つまらない人間の子供」でなくてはならなかった。

ディオニュソス おお、何とさもしい女の浅知恵！ そんなバカげた思惑のために、母上は下賤な男と通じたという汚名を着せられたのか。本来ならテオトコス（神の母）として人々から崇められるべき母上なのに！ 許せない！

ポリウドーロス 私も許せない。だがアガウエ姉さんの思惑は、そのまま現実のものとなってしまったんだ。リアリスト（現実主義者）の父王は、もともと夢見がちなセメレー姉さんを好いていなかった。だから、アガウエ姉さんが父王に取り入るのは、とても簡単なことだったんだ。

ディオニュソス 親子して……なんて馬鹿な人たちなんだ。

ポリウドーロス そうして父王は、アガウエ姉さんが捏造した歴史を国民に教え込み、ディオニュソス、君という存在を国民の意識から抹殺した。結果、セメレー姉さんの墓は見捨てられ、今テーバイの王位はペンテウスが継いでいる。これが君の故郷の現状だ。

ディオニュソス 本来なら、叔父上が王位を継ぐべきなのではないのですか。

ポリウドーロス アガウエ姉さんがそれをさせなかったし、私も殊更に王位を継承したいとは思っていません。生まれつき虚弱だったからね。

ディオニュソス ああ……

ポリウドーロス だがそれでも、セメレー姉さんの無念を思うと、今の王家のありかたには、本当に齒噛みする思いだ。

ディオニュソス 私も同じ思いです。母上への侮辱の上に構築された王家。本当に許せない。

「ディオニュソス、セメレーの墓の前に膝をつく」

ディオニュソス 母上、きっと仇は取りますよ。あなたのためなら、僕は何だってやれるんです。だってあなたは、私を純粹に愛してくれた唯一の人の人なんですから。（墓石を撫でながら）私はあなたの汚名を全て雪いで、その上でテオトコスとしての崇敬を取り戻してあげましょう。あなたはゼウスに愛された女であり、このディオニュソスを生んだ、誉れたかき「神の母」なのですから。

ポリュドーロス 君は何をするつもりなのかね。

ディオニュソス おいおい分かります。それよりも叔父上、まずは、あなたにお礼をさせてください。あなたが母上の墓前に捧げてくれた、この花に対するお礼です。（立ち上がって）今夜、この地で初めての「ディオニュソスの祭」を開きます。ですから、どうかその祭にいらっしゃってください。きっと楽しんで頂けると思います。

ポリュドーロス うわさに聞く「大ディオニシア祭」だね。ぜひ行かせてもらおう。

ディオニュソス では夕刻に、遣いの者を送ります。

ポリュドーロス 君は？ これから何かあるのかね。

ディオニュソス 夜の祭には、もちろん私も参加します。でも、その前にやっておきたい事がある。一度この目で、王城の中の様子を見ておきたいんです。王城の外観ではなく、王城の中の様子を。

ポリュドーロス 気持ちには分かるが、旅人が容易く入れるような場所ではないぞ。たとえ私が先導しても、尋問を受けて入城を止められることだろう。

ディオニュソス いえ、先導してくれとは言いません。むしろ、私が叔父上をお願いしたいのは「叔父上の姿そのものをお貸しください」ということです。

〔ディオニュソス、一瞬にしてポリュドーロスの姿に変わる〕

ポリュドーロス お、驚いた。君が神の子であることを疑ったことはないが、しかし直接その神威を目にしてしまうと、もはや絶句するしかないな。ああ構わない。その姿で王城に入ってくれ。君が帰るまで、私はここで待っているから。

テーバイの王城

石造りの立派な城。ディオニュソスは、ポリュドーロスの姿をもって、すでにその内部に潜入している。舞台は広大な大広間で、奥のほうに大きな椅子があり、そこに老カドモスが座っている。その横には

アガウエがまわり付いており、親子は楽しそうに談話している。

ディオニュソスが二人のほうに近づこうとすると、その歩みを遮るような形で、予言者テイレシアースが登場。彼は盲目なので、若い従者クレシラスに手を引かれている。

テイレシアース（クレシラスに）これは誰だ？

クレシラス は？ ポリュドーロスさまではございませんか。

テイレシアース 本当にそうか？

クレシラス どうしたのですテイレシアースさま。お目が見えないとはいえ、いつもは、まるで全てが見えているかのように、眼前の光景をご説明されますのに。今日にかぎっては、親しいポリュドーロスさまの事さえ分からないのですか。

テイレシアース（ディオニュソスに）あなたはポリュドーロス殿でしょうか。

ディオニュソス いかにもポリュドーロスだが。

テイレシアース そうですか……私は盲なので人の姿を見ることはできません。ですがその代わり、心眼で人の魂を見分けることが出来るのです。

ディオニュソス ……うむ。

テイレシアース してみると、いつものポリュドーロス殿の魂は、私の掌に乗ってしまう程度の大きさなのに、今日はそれが、馬鹿に大きく感じられるのです。掌に乗らないどころの話ではない。今日のあなたの魂たるや、私には両手で抱えることも出来ないのです。あなたは本当にポリュドーロス殿ですか。

ディオニュソス（小声で）さすが盲目の大予言者と呼ばれるだけのことはあるな。

テイレシアース やはり……そうしますと、どちらの神さまでございましょう。

ディオニュソス 他でもない、この地の神である。私は、この国の王女を母として生まれた神、ディオニュソスだ。

クレシラス（大声で）えーっ！

ティレシアース ば、馬鹿め、そんな声を上げるな！

「クレシラスの声に反応し、アガウエとカドモスが、三人のほうを向く」

アガウエ 何事です！

クレシラス 何でもありません！

アガウエ あらポリュドーロス、来てたのね、あなたが何かをしたの？

ティレシアース（ディオニュソスに向けて小声で）申し訳ありません。ですが、あなたが神さまと分かれば、私はもう邪魔だてしませんし、こいつにもさせません。私たちは今後、あなたさまのお味方です。

ディオニュソス 分かった。

アガウエ どうして返事しないの？ 何をコソコソ喋ってるの？

ディオニュソス 何でもありません、姉上。

「ディオニュソスが、アガウエとカドモスのいる方に歩いていく」

アガウエ 私はコソコソ話が嫌いなもの。とくにポリュドーロス、あなたがするコソコソ話は大嫌いだわ。だって私の悪口に決まってるもの。

ディオニュソス どうして、そのようなことを言うのです。

アガウエ どうしてですって？ いけしゃあしゃあと言うのね。だって、この国のなかで、唯一あなただけが、私の色に染まってないじゃないの。

ディオニュソス 姉上の色とは何でしょう。

アガウエ 王も国民も承知していることを、あなただけが認めていないということよ。そう、私とペンテウスだけが、この国を統治するに相応しい人間であるということを、ただ一人、あなただけが疑っているのわ。

ディオニュソス ペンテウスは、すでにこの国の王になっているではありませんか。そして私は、彼の臣

民の一人に過ぎません。王を疑うなど、滅相もない話です。

アガウエ　じゃあ改めて聞くわ。セメレーは誰の子供を孕んだの？

ディオニュソス　……

アガウエ　ほら、やっぱり今日も答えないじゃない。あなたはいつもそう。私たちに恭順すると言いがら、こんな簡単な国史を認めることもしない。一体いつになったら、あなたは認めるのよ。セメレーは、下賤な男の子供を孕んだのだって！

カドモス　落ち着きなさい、アガウエ！

アガウエ　だってお父さま、ポリュドーロスが私の陰口を言うんですもの。今日なんて私がいるところで、これ見よがしに。しかも相手は、あの皮肉しか言わない予言者なんですから、もう、酷いっただけじゃないですか。

ディオニュソス　陰口など言っておりません。

カドモス　アガウエよ、ポリュドーロスは、実の姉（セメレー）を悪しざまに言えないだけじゃろうて。決して、お前が言っていることを疑っている訳ではないのだ。のうポリュドーロスよ。

ディオニュソス　……

アガウエ　ほら答えないわ。お父さま、違うのよ。ポリュドーロスは、私が言っていること自体を疑っているのよ。ひどいわ、ひどいわ。あたし何も嘘なんか言っていないのに！

カドモス　ポリュドーロス、どうしても言わないのじゃ！　アガウエが可哀そうではないか。

テイレシアース　おやめなさい、二人とも。それ以上ポリュドーロス殿をなじられるのであれば、私としても辛い予言をしなければならなくなる。

カドモス　辛い予言じゃと。なんの予言じゃ？

テイレシアース　このテバイ国が亡びるという予言です。セメレーの御子の怒りによって。

アガウエ　セメレーの子ですって？

カドモス たわけが。セメレーが宿していた子供は、ゼウスの雷火によって、胎児のまま焼け死んだはずではないか。

テイレシアース それは、その子供が「人間の子」であった場合の話です。

カドモス では何か、テイレシアース。お前までが、あの世迷い言を信じているというのか。セメレーが大神ゼウスの子を孕んだという話を。

テイレシアース いかにも。

アガウエ どうしたというの今日は。どうして今日は、こんなにも嫌なことばかり耳にしななければいけないの。なんて嫌な日、なんて嫌な場。みんな狂ってるわ！

カドモス テイレシアース、本当にどうしたというのだ今日は。いや、たしかにお前が、アガウエやワシを良く思っておらんことは知っている。じゃがこれまで、ここまでハッキリと、我々と敵対したことは無かったではないか。

テイレシアース 時が満ちたのです。隠されていたものが、すべて明るみに出される日が来たのです。かかる時にあっては、もはや保身のための嘘など虚しいだけです。

アガウエ 嘘？ お前の嘘？ それとも私が嘘をついているという話？

テイレシアース どちらもです。あなたの妄言という名の嘘。私の沈黙という名の嘘。また老王の耄碌という名の嘘までが、もうすぐ神の光に照らされて蒸発してしまうでしょう。

アガウエ なんていう侮辱！ なんていう僭越！ 自分の主人に対して、そんな事を言うなんて絶対に許せない！ 今すぐお前を殺してやりたいわ！

テイレシアース 予言者の主人は、未来を見晴るかす神々だけです。

アガウエ くーっ！ 人を馬鹿にして、このクソヤローが！

テイレシアース 私がクソヤローなら、あなたはバカ女です。

ディオニュソス（割って入る形で）もういい、やめなさいテイレシアース。

テイレシアース あ……すみませぬ、あなたさまの前で、取り乱しました。溜まりに溜まっていた鬱憤を抑えられなくて。

ディオニュソス 姉上も落ち着いてください。私が悪かったのです。

「アガウエは少し前から号泣しており、もはや何も言えない。そんな娘の肩を抱いて、カドモスが慰めている」

カドモス アガウエよ、今はペンテウスが隣国に行っているから、もともと不安的なお前の心が、いつも以上に不安定になっておるのじゃろう。

アガウエ うう、うう……

カドモス だが、あと一週間もすれば、ペンテウスもここに帰ってくる。そうすればお前だって落ち着くはずだ。それまでは、なるべく物事を、根詰めて考えないようにして過ごしなさい。のう、幾つになっても可愛い娘よ。

アガウエ ……う……うん。

ディオニュソス 私とテイレシアースも退席したほうが良さそうですね。

カドモス ああ、そうしてもらおう。

ディオニュソス ですが父上、その前に一つだけお尋ねしたい。セメレー姉さんが、お腹のなかの子に、早くも名前を付けていたことを知っていますか。

カドモス いや、初耳だ。お前はその名前を知っておるのか。

ディオニュソス ええ、ディオニュソスというのですよ。

カドモス 最近オルコメノスで信者を増やしているという神と一緒の名か。偶然だな。

ディオニュソス ええ、偶然ですね。

第3章

カドモスとアガウエ

登場人物

カドモス テーバイの先王。今は孫のペンテウスに王位を譲っている。

マイナスたち デイオニュソス教の中心的信女。ここでは声だけの出演。

デイオニュソス セメレーの子。アガウエの甥。カドモスの孫。

アガウエ カドモスの娘。故エキオンとの間にペンテウスを生んでいる。

狩りの風景

晴れた日の草原。アフリカのサバンナのよう。動物たちが草をはみ、空には鳥たちが舞う。乾いた空気に包まれて、カドモスが一人かかる草原に立つ。しかし彼の姿は、老人のそれではなく、なぜか壮年期の気力が漲った姿である。

カドモス おお、こんなにも力強い自分を感じるのは何年ぶりだろう。腕にも足にも若い張りが漲っている。老いるごとに萎れていった四肢の血脈が、今になって頼もしく蘇ってきた。これは一体いかなる神からの恵みなのだろう。誰にせよ、きっと偉大な神が私に働きかけてきたに違いない。なにしろ、かつては灰色だった世界が、今はこんなにも輝いて見えるのだから。

マイナスたち

若人となったカドモスよ、

さあ、その手に槍を握りなさい。

お前の視界のなかには、

幾頭とも知れぬ獲物たちが、

若き狩人に震えながら、

恐れている姿があるでしょう。

ならば震える彼らの恐怖を、
いっそ現実のものにしてやって、
お前は動物たちの頭上に君臨する、
偉大な獣の王とおなりなさい。

カドモス 天空から声が聞こえてくる。若い女たちの清らかな声音だ。まるで女神の歌のように響くその声は、俺の体に噴出するような力を与えずにはおかない。槍か、おお摩訶不思議、すでに俺はそれを握っている。動物だと？ おお、いるいる。幾らでもないか。

マイナスたち

駆けなさい、駆けなさい、

大地を蹴って、

大きく息を吸い込んで。

乾いて煌めく空気は、

あなたの肺で力へと変わり、

その力は、あなたの腕からも、

足からも、また吐く息からも、

黄金色の熱気となって発散されていく。

そして、その金色の熱気こそが、

空気を乾かしては煌めかせるのです。

生きた自然と一つになって、

そこに力を循環させる喜び、

それこそが自然の快樂なのです。

カドモス 動くぞ動くぞ。俺の脚はこんなにも早く動く。まるで韋駄天のようではないか。獲物の獣たちももう、俺のすぐ傍にいないではないか。

マイナスたち さあ槍を構えなさい。

カドモス こうか。

マイナスたち 槍を投げなさい。

カドモス 見ている、こうやるのだ。

〔一匹の鹿が、カドモスの槍に貫かれる〕

マイナスたち 見事、仕留めました。

カドモス やった！ これなのだ。これが俺本来のあり方なのだ。動物の断末魔の顔、それにビクともしない無表情な俺の顔。この対照こそが、奴隷と王の格差であり、不可逆な風格の格差なのだ。

マイナスたち つまりお前は、王のなかの王なのですね。

カドモス そう、俺こそは誇り高き「獣の王」だ。これまでのように、テーバイの王、人間たちの王であることは、むしろ俺を疲弊させ、人民たちの下僕とさせ、ついには俺を、低劣な侏儒にまで貶めた。だから俺はもう二度と、人間の王に戻ろうなどとは思わない。

マイナスたち では、どうするつもりなのです？

カドモス 知れたこと。俺はここで獣の王として君臨するのだ。本物の王者として、動物たちを狩って暮らすのだ。狩って狩って狩って暮らすのだ！

マイナスたち

獣の王カドモスよ、

お前の血潮が煮えたぎっていること、
今まさに沸騰しようとしていること、

それが私たちにも、

痛いぐらい直接に伝わってきます。

見開いた目は赤く血走り、その口には、

白い唾きの泡で飾られた、

狂喜の笑みが浮かんでいる。

ええ、とても素敵な顔だわ。

私たちの仲間の顔だわ。

カドモス 女神たちよ、早く俺に、つぎの獲物を用意してくれ。体を動かすのを止めてしまったら、体中を巡っている血潮が、すぐに湿って冷たくなってしまいそうだ。

マイナスたち

いいでしょう。

あそこを見なさい。あれは豹です。

しなやかな足で地面を蹴る、

この草原の美しくも獰猛な「ぬし」です。

お前にはこれから、
あの豹を仕留めてもらいましょう。

カドモス 豹ときたか。足のはやい動物だ。俺は奴に追いつけるだろうか。

マイナスたち

思案などしてはなりません。

それは開かれた可能性を自分から閉じる、
何よりも愚かな行為です。

案ずるより前に走り、

考えるよりまえに、

必要なことの全てを成し遂げること。

それが凡そすべての、

「奇跡を起こす者」の生き方なのです。

カドモスよ、お前は自分が、

奇跡を起こすことも出来ないほど、

凡俗の沼水に浸かりきった、

小人物だと思うのですか。

カドモス いや違う。俺は王のなかの王だ。獣の王だ。そんな俺が在るところに、奇跡が起こらないはずがない。だから行こう。走り出そう。あの豹に向かって飛び立とう。

マイナスたち

急ぎなさい、急ぎなさい。

逃げていく豹に追いつき、

向かってくる豹に対峙しなさい。

鈍重な槍などは捨ててしまつて、

あなたの五体に溢れる、

血潮の熱さだけで勝負なさい。

カドモス すごいぞ。まるで大地から、直接栄養を貰っているようだ。一步駆けるごとに、足の裏からピンピンと力が流れ込んでくる。

マイナスたち

そのとおりです。

お前にとっては、

この大地そのものが、
全幅の信頼を寄せてよい、
不変の味方なのです。

カドモス そうして俺の脚が動く。なんて軽い腿なんだ。なんて高く上がる膝なんだ。なんて力強く土を蹴るつま先なんだ。槍なんか、とうに捨ててしまっている。道具など無くとも、俺はすでに百人力だ。

マイナスたち

獣の王カドモスよ、

見れば豹は、すぐそこにいます。

もはや逃れられないと悟った標的は、

いまや、お前の鼻先を狙って、

エイヤと飛びつこうとしています。

獣の王よ、逃げますか？

それとも、そいつをねじ伏せて、

王としての箔を、何重にも重ねて、

その輝かしい肩に貼り付けますか？

カドモス 尋ねるまでもない。こんな豹一匹に、どうして俺がたじろぐ事があろうか。（豹に向かって）卑しい奴隷の分際で、王の目を、そうじっと見つめていいと思っているのか。不躰な奴め、お前には相当の罰が要るぞ。さあ、打ちのめしてやるからこっちに来い。

マイナスたち

来ました。飛び上がりました。

お前に噛みつきようとして、

豹は、濡れた大口で、

勢いよく襲いかかってきます。

大丈夫ですか、

大丈夫ですかカドモス！

カドモス 何の心配をしているのだ女神たちよ。たしかに敵の爪は、俺の胸を少しばかり傷つけた。だが、すでにその上顎は俺の右手に、下顎は俺の左手に掴まえられている。そうして動けなくなって、まるで猫同然にウミューウミューと鳴いているではないか。

マイナスたち

すばらしい、すばらしい、

本当に惚れ惚れするような逞しさ。
その力強さたるや、
まさに王のなかの王。

カドモス これしきのことでは何を騒ぐか。この腕に漲る力を甘く見ているのではないか。見よ、そなたたちに、俺の本当の力を教えてやる。

マイナスたち

おお、まさに剛力、

豹の口が大きく拡げられて、

今にもパッキリ裂けてしまいそう。

これが本当は誰の口なのか分かったら、

カドモスは自分の残忍さに、

果たして耐えていられるだろうか。

カドモス 何をゴチャゴチャ言っておる？ それより、この断末魔の呻きを聞くがいい。そして、この

顎のメリメリという音も聞け。これこそ王の権威を祝う音。祝福の角笛の、高らかな音階に他ならない。

〔ここで急に舞台が暗転する〕

テーバイの王城

アガウエの寝室に現れたディオニュソス。その姿は、本来の彼のものである。アガウエは、ディオニュソスの神力によって、身動きが取れなくなっている。すなわち彼女の体は、直立したまま壁に張り付いている。

一方のディオニュソスは、アガウエのベッドに座っている。彼は相手と目を合わせない状態で、伯母に向かって話をしはじめる。

ディオニュソス ちょうど十五年前、母はこの王城の庭で死んだのだ。アガウエよ、お前は私の母の名を知っているか。

アガウエ そんなこと知るものか。そんなことより、はやく私の体を自由にせよ。曲者め、突然部屋に入ってきて、私の体に、いったい何をしたのだ。お前は妖術使いなのか。そのように嫌らしいなりをしておって。

ディオニュソス 私の姿は、私の歴史そのものだ。私がまどっている鹿の皮は、かつて私が鹿として生活していた頃の記念。ブドウの葉の冠は、酒神としての象徴。そしてこの杖は、私を狂気の淵から救ってくれた、至高の神の杖を模したもの。この杖を目にするたびに、私はキュベレー神殿で起こったことを思い出す。

アガウエ 何を訳の分からないことを！

ディオニュソス（苦笑して）フッ、なぜ怒る？ 聞かれたことに素直に答えてやったのに。お前のほうは、私の尋ねたことに、まだ何も答えていないではないか。ならば答えてもらおうか。アガウエ、私の母の名を言ってみよ。

アガウエ 知らぬと言っておる。

ディオニュソス 知らぬはずがないのだよ。雷に打たれて死んだ妹のことを、人が忘れられる訳があるまい。

アガウエ セメレーのことを言っておるのか。だが、ならばなぜお前は、セメレーのことを母と呼ぶ？ セメレーに子供などおらぬはず。

ディオニュソス 妹が妊娠していたことを知らぬのか？

アガウエ それは知っている。だが、その子供は、雷火によって、母もろとも死んだはずだ。いま生きているはずがない。

ディオニュソス それは、お前の妹の子供が「人間の子」であつたら話だ。それが神の子であれば、雷ぐらいで死ぬことはない。

アガウエ 戯言を言うな。セメレーが孕んでいたのは人間の子だ。

ディオニュソス なぜそう決めつける。

アガウエ 決めつけるのだと？ それが事実だからだ。セメレーは下賤の男と通じながら、その相手を

大神ゼウスと偽った。だからこそ罰を受けたのだ。であるならば、胎の子は、人間の子供に決まっているではないか。

ディオニュソス ではなぜ、今ここにセメレーの子を名乗る者がいるのだ？　そして、どうしてお前は、そのセメレーの子の神力によって、かくも身動きを取れなくなっているのだ？

アガウエ 神力などと僭称するでない。お前が使っているのは妖術であろう。そしてお前は妖奇の者。神などとは関わりない卑しき輩じゃ。

ディオニュソス 恐ろしいことだ、人間がこれほどにも傲慢になれるとは。まさしくお前には懲罰が必要だ。だが、その罰を与える前に、貴様にひとつ、私の思い出ばなしを聞かせてやろう。あの優しかった母上の思い出ばなしをな。

アガウエ これは片腹いたい。胎児が母親の思い出を持っているというのか。

ディオニュソス なめるなよ。私は、ザグレウスとしては、生まれたばかりでも喋れたのだ。そのような神ならば、たとえ胎児であったとしても、ぼんやりとした記憶を残すぐらい容易いことだ。

アガウエ ザグレウスとは誰のことだ。

ディオニュソス いちいち口を挟まず、お前は黙って聞いておれ。

〔冠からブドウの蔓が伸び、それがアガウエの口をふさぐ〕

ディオニュソス 私がまだ母の胎にあったとき、そこで感じていたのは、私に対する、母の一途な愛ばかりだった。母は全身全霊をもって私を愛してくれたし、それはあの雷火の中でも変わらなかった。母は雷に焼かれながら、私に、

「この手に抱くことも出来なかったけれど、心からお前を愛していた」

と言ってくれた。あのときの母の顔を、私は確かに覚えていて。優しい眼差し、悲しげな涙、そしてあの最後の微笑み。たしかに母は人間だったが、でもどんな女神よりも美しかった。

アガウエ むう……

ディオニュソス 母体という住処を失った胎児である私は、父ゼウスの太腿へと埋め込まれた。そうして月が満ちて産み落とされると、父は私を子鹿の姿へと変えたのだ。その後の経緯はとも話し切れるものではないが、とにかくそのようにして、セメレーの息子は「神の子」としての道程を歩みはじめた。

「アガウエの口を解放してやる」

ディオニュソス どうだ？　これだけ詳しく話してやったのだ。お前の妹が神の子を孕んだこと、これが紛れもない事実であることが伝わったであろう。

アガウエ 伝わるものか！　そんなものは全てデタラメだ。妹は下賤の男と通じてゼウス神に罰せられたのだ。そうと決まっているのだ。

ディオニュソス まだ言うか！　母の誇りを取り戻すためだ。言え、認めろ、自分の妹は、ゼウスとの間に「神の子」を儲けたのだと。お前の口からそれを聞くまでは、私は母のために、自分が何かをしてあげられたと思うことが出来ないのだ。

アガウエ 死んでもそんなことは言わない。そんなことを言ったら、これまで私が、ペンテウスのために積み上げてきたものが全てが、失われてしまう。テーバイの王に相応しいのはペンテウスだけなのだ。それ以外の王候補などいてはならない。身内に「神の子」などいてはならない。神の子を妊娠した妹などいてはならない。

ディオニュソス 身勝手な人間の浅ましさよ、神をも恐れぬ傲慢さよ！

アガウエ 何とでも言うがいい。お前をセメレーの子と認めるぐらいなら、ゼウスの息子と認めるぐらいなら、いっそ私は、今ここで死にます。

ディオニュソス ほう、では本当にその覚悟があるのか確かめてやろう。

「誰かが、走って近づいてくる足音が聞こえる」

アガウエ 誰？

ディオニュソス 獣の王だ。

「アガウエの寝室に、老父カドモスが入ってくる」

アガウエ お父さま！　ああお父さま、どうか私を助けてください。

カドモス（すがる目をしたアガウエに向かって）卑しい奴隷の分際で、王の目を、そうじっと見つめていいと思っているのか。不躰な奴め、お前には相当の罰が要るぞ。さあ、打ちのめしてやるからこっち

に來い。

アガウエ 何を言ってるの？ お父さま、何だか目つきがおかしいわ。

ディオニュソス アガウエよ、この老人には、お前が獐猛な豹に見えているのだ。

アガウエ そんな馬鹿な！

「カドモスがアガウエに近づく。アガウエのほうも、自由の利かない腕を必死に動かし、何とかカドモスの胸に触れる」

ディオニュソス やめておけ、お前の指は、今のカドモスにとっては豹の爪だ。

「カドモス、怒りながらアガウエの口を掴む」

カドモス 何の心配をしているのだ女神たちよ。たしかに敵の爪は、俺の胸を少しばかり傷つけた。だが、すでにその上顎は俺の右手に、下顎は俺の左手に掴まえている。そうして動けなくなつて、まるで猫同然にウミューウミューと鳴いていてではないか。

アガウエ（カドモスに顎を拡げられて）あぐ、あぐ！

ディオニュソス そのうち口が、上下に裂けてしまひそうだな。

カドモス これしきのことでは何を騒ぐか。この腕に漲る力を甘く見ていてのではないか。見よ、そなたたちに、俺の本当の力を教えてやる。

アガウエ（さらに口を拡げられて）たしゅけて……

ディオニュソス（アガウエに）お前が「セメレーは神の子を孕んだ」と言えば、すぐにでもカドモスを止めてやるが？ でも死んでも言わぬのだろう。

カドモス 何をゴチャゴチャ言っておる？ それより、この断末魔の呻きを聞くがいい。そして、この顎のメリメリという音も聞け。これこそ王の權威を祝う音。祝福の角笛の、高らかな音階に他ならない。

アガウエ（口から血を流し、白目を剥きながら）言ういますう……セメレーは……ゼウスの子を孕みみゃいた……（氣絶する）

ディオニュソス うむ、確かに聞いたぞ。ではカドモス、ここで目を覚ますがいい。

カドモス（ハッとなって）な、なんだ、わしは何を……アガウエ？ わしは何でアガウエの口を掴んでおるのじゃ。（手を離すと同時にディオニュソスを見て）お、お前は何者だ！

ディオニュソス 私は、お前の孫にして、セメレーの子ディオニュソスだ。詳しいことは、あとでシレノスから教えてもらうがいい。それが済んだら、お前とアガウエを、私の信者に加えてやろう。

カドモス（混乱しながら）何なのだ？ 私の孫？ セメレーの子？

ディオニュソス まあ少しは落ち着くがいい。そして、はやく娘の手当てでも始めるべきだ。なにせその血だらけの口は、当のお前自身が傷つけたものなのだから。私はもう行く。

〔ディオニュソス、アガウエの寝室から出て行く〕

セメレーの墓の前

三日月の月明かりの下で、しゃがんだディオニュソスが、母親の墓を撫でている。そうして愛しげに、墓に向かって話しかける。

ディオニュソス 母上、今日ひとつだけ、あなたの名誉を取り戻すことが出来ました。アガウエが、自身の口でもって、あなたがゼウスの子を孕んだということを認めたのです。もちろん、それだけでは完全な名誉回復にはなりません、それでも墓に手向ける花一輪の価値ぐらいはあるでしょう。

〔ディオニュソス、立ち上がって、墓に背を向ける〕

ディオニュソス でも、すべてはこれからです。アガウエとカドモスを私の信者にしたのは、彼らに、今よりもっと辛い境遇を与えるためなのですから。奴らが母上の名誉のすべてを奪ったように、私もまた、奴らの大切なものを根こそぎ奪ってやりましょう。そのときに奴らが流す涙こそが、私が母上に贈る花束であるのです。

戯曲ディオニュソス 二人の母 I

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
